むかしむかしの　おはなしです。

あしがらやまに　げんきな　おとこのこが　うまれました。

なまえを　きんたろうと　いいました。

「つよくて　やさしいこに　なるのですよ」

おかあさんが　あかい　まえかけと　まさかりを　くれました。

きんたろうは　まいにち　まきわりの　おてつだいを　します。

「いっしょに　あそぼう」

うさぎや　きつね、しかに　りすが　きました。

「いいよ」 きんたろうは　どうぶつたちと　すっかり　なかよくなりました。

そこへ　とても　おおきな　くまが　やってきました。

「くまどん、しょうぶだ！」

きんたろうと　くまは　すもうを　はじめました。

「はっけよい　のこった」

きんたろうも　くまも　つよくて　いっぽも　ゆずりません。

「がんばれー」

とうとう　きんたろうが　くまを　えいやっと　なげとばしました。

「まいった」

「くまどんも　いっしょに　あそぼうよ」

おおきな　くまも　ともだちに　なりました。

あるひ、きんたろうは　まさかりを　かついで　くまにのり どうぶつたちと　くりひろいへ　でかけました。

ところが、こまったことに　たにまの　はしが　こわれて

わたれません。

「ぼくに　まかせて」

きんたろうは　おおきな　きを　りょうてで　おしました。

ぐぐ、ぐぐ……、どかん！

きが　たおれて　まるたの　はしが　できました。

「ありがとう、にっぽんいち　つよくて　やさしい　きんたろう！」

みんなは　おおよろこびで　はしを　わたりました。

そして、おなかいっぱい　くりを　たべたのでした。

おしまい

**アマビエの**

むかしむかしの　おはなしです。

えどの　まちでは　きみょうな　びょうきが　はやって　いました。

せきが　なんにちも　つづいたり、つかれて　おきあがれなくなる

びょうきです。

たろうの　おかあさんも　ずっと　せきを　していました。

「ぼくが　さなかを　とってくる」

たろうは　うみへ　むかいました。

よあけ　まえの　うみは　すみを　たらしたように　まっくろでした。

「おかあさんが　げんきに　なりますように」

そのときです。

とおくの　うみの　なかに　あおじろい　ひかりを　みつけました。

「なんだろう？」

ふしぎに　おもった　たろうは、おとなを　よんできました。

ひかりは　だんだん　ちかづいて　きます。

ざばり。

なみを　かきわけて　みたことの　ない　いきものが　あらわれました。

とりの　ような　くちばしに　ひしがたの　め、

ながい　かみのけは　ももいろさんごの　ように　あかく、からだは　　　　　にじいろの　うろこに　おおわれています。

おびれが　みっつに　わかれて　にんげん　みたいに　たちあがりました。

「わたしは　アマビエ」

ぴかぴかと　ひかる　めが　たろうを　みつめました。

「わたしの　すがたを　えに　かいて　みせれば、びょうきが

　　なおるでしょう」

「ほんとう？」

「それから、このあと　ろくねんかん　こめも　さかなも　たっぷり

　とれるでしょう」

アマビエは　そういうと　ふたたび　うみへ　かえって　いきました。

「まさか」

おとなは　はじめ　しんじません　でした。

しかし、たろうは　アマビエの　えを　おかあさんに　みせました。

「なんだか　きぶんが　いいわ」

おかあさんの　せきが　ぴたりと　やみました。

「すごいや。みんなにも　おしえて　あげよう」

たろうと　おかあさんは　せっせと　えを　かいて　びょうきの　ひとへ　　　　とどけました。

「なおったぞ」

「げんきに　なったわ」

「ぼくも　アマビエの　えを　かこう」

「わたしも」

アマビエの　えは　どんどん　つたわって　いきました。

いつしか、おとなも　こどもも　みんな　えを　かいて　いました。

びょうきは　あっというまに　きえて　なくなりました。

それだけでは　ありません。

うみへ　でれば　たいりょうの　さかな、はたけでは　どっさり　たべものが　とれるように　なりました。

「アマビエの　おかげだね」

えどの　ひとびとは　アマビエの　えを　たいせつな　おまもりに　しました。

おしまい

むかしむかしの　おはなしです。

「あしたは　おしょうがつ。

おもちを　たべたいですねえ」

おばあさんが　いいました。

「たきぎを　うって、おもちを　かってくるよ」

おじいさんは　まちへ　でかけて　いきました。

おおみそかの　まちは　おおにぎわいです。

「たきぎは　いらんかねー？」

おじいさんの　こえは　なかなか　とどきません。

「やれやれ、こまった」

そこへ、かさうりが　やってきました。

「たきぎは　うれましたかな？」

「いいえ、ぜんぜん」

「わしもです。どうでしょう、

たきぎと　かさを　こうかんしませぬか？」

ふたりは　とりかえっこを　して　にっこり　ほほえみました。

かえる　とちゅうで、ゆきが　ふってきました。

「おや、あそこに　みえるのは……」

しろい　あたまが　いち、に、さん、し、ご、ろく。

ゆきを　かぶった　おじぞうさま　でした。

「さむいでしょう。この　かさを　どうぞ」

おじぞうさまに　かさを　かぶせます。

ところが　かさは　5つ。

おじぞうさまは　6たい。

ひとつ　たりません。

「そうだ。わしの　ほおかむりを　つかってください」

さいごの　おじぞうさまには、

じぶんの　てぬぐいを　かけて　あげました。

いえでは　おばあさんが　しんぱいして　いました。

「ぶじで　よかったです」

「おもちを　かえなくて　ごめんね」

「いいんですよ、そんなこと」

おじいさんは　きょうの　できごとを　はなしました。

「それは　ほんとうに　よいことを　しましたねえ」

ふたりは　しあわせな　きもちで　ねむりに　つきました。

まよなか、ふしぎな　こえが　します。

えっさ　ほいさ

はこべや　はこべ

「だれだろう？」

そうっと　とを　あけてみました。

そこには、おもちや　やさいが　どっさり！

はるか　むこうに　かさが　5つ　みえます。

「あれは、おじぞうさま！」

いちばん　うしろを　あるくのは、

てぬぐいを　かぶった　おじぞうさま　でした。

「なんて　ありがたい」

ふたりは　ふかく　かんしゃ　しました。

そうして　いつまでも　しあわせに　くらしましたとさ。

おしまい